

月刊

平成24年3月1日発行(毎月1回・1日発行)第300号

シルバー人材センター

高齢社会を生きる

創刊300号



(社)全国シルバー人材センター事業協会編

2012

3

つどいの広場事業「おおきくなあれ」で 女性会員の活躍の場を広げる

女性会員の仕事が少ない、入会希望者のために新しい仕事を開拓する必要に迫られていた。シルバー人材センターがつどいの広場事業を引き受ければ常時三世代交流ができ、それが地域社会による子育て支援のきっかけになると市役所を説得。平成二十年に市からの委託を受けて「おおきくなあれ」がオープンした。女性会員の熱心な取り組みが評価され、二十三年十一月に県から愛顔(えがお)の子育て顕彰奨励賞を受賞した。



今治市SCのつどいの広場事業「おおきくなあれ」は、愛媛県が創設した「愛顔の子育て顕彰」の奨励賞を受賞した

取り組める新しい分野を開拓しなければならぬ。それがここ十数年来の課題であった。たまたま福井市SCの子育て支援事業を見学したことがきっかけとなり、これなら今治市SCでもできるのではないかと考えたのが「つどいの広場」事業であった。

子育て支援事業 調査準備委員会

今治市では子育て支援推進のために市内の事業者に委託して複数の「つどいの広場」を開設するという計画がある。「つどいの広場」はすでに市直営、NPO法人運営、幼稚園運営の三か所があった。それに続く四か所目にシルバー人材センターとして手を挙げたいと、十九年七月、センター内に子育て支援事業調査準備委員会を設置した。

メンバーは理事二人、市職員一人、幼稚園関係者一人、保育資格保有者一人、子育て中の母親一人、事務局二人の計十人。十九年度中に三回の会合を開いて市民にアンケートを実施し、先進セ

必要に迫られた女性会員の仕事開拓

今治市SCでは、草刈り・剪定などの屋外作業が受注の大半を占めている。その担い手は男性会員で、女性会員は現在二割強。かつては一割前後の時代が長く続いた。今治の女性たちには、地場のタオル業界から依頼される「ヘム縫い」というタオル生地をミシンで縫う内職があったため、シルバー人材センターに入会して働こうという人は少なかった。しかし、バブル崩壊後状況が変わった。タオル業界の多くが製造拠点を中国に移し、

内職が激減。仕事を失った女性が入会を申し込んでくるようになり、センターは女性会員の仕事を開拓する必要に迫られた。

高齢者家庭等の掃除、炊事、買い物などの家事援助の仕事があったものの、件数はわずかだった。その一部に介護の仕事も含まれていたが、平成十二年の介護保険法施行後に多くの介護事業者が誕生し、同センターは競合を避けてこの分野から撤退した。

女性会員のために、ある程度の人数で継続的に

別表 1 最近6年間における事業運営状況
(平成17年度～平成22年度)

年度	会 員 数			粗入 会率	就業実人員 (延人員)	就業 率	受注 件数	契約金額 千円	公 民 比
	男	女	計						
平17	655	166	821	1.4	663 (74,337)	80.8	4,745	353,036	58.4/41.6
18	656	175	831	1.4	702 (80,322)	84.5	5,443	373,393	56.7/43.3
19	719	186	905	1.5	749 (83,996)	82.8	5,679	389,965	52.9/47.1
20	758	236	994	1.6	795 (88,292)	80.0	6,164	410,233	51.8/48.2
21	842	247	1,089	1.7	852 (90,834)	78.2	6,092	424,464	51.7/48.3
22	870	260	1,130	1.8	866 (94,503)	76.6	6,492	438,438	50.8/49.2

ンターの子育て支援状況を観察して、子育て支援への参入の可能性と方法を探った。

アンケートは市内にある十五の保育所と九の幼稚園の協力を得て子育て中の五百二十世帯を対象に、シルバー人材センターが子育て支援に参入した場合に利用するかどうかを聞いた。回答はおおむね好意的だったが、元気に走り回る子どもたちがシルバー世代が対応できるか不安を感じる声も一部にあった。

市役所の子育て支援担当者とセンターの事務局員とで、防府市SC、山口市SC、太田市SC、草加市SCを視察した。それぞれ特徴的な子育て支援事業を見学したが、中でも草加市SCのつどいの広場事業は市からの委託料によって運営されており、今治市SCの目指すものに最も近いように思われた。

シルバーの子育て支援事業としては、①施設を確保して子どもたちを預かる②依頼者宅に向いて子どもたちをみる③「つどいの広場」を開いて母親と子どもたちに来てもらうなどが考えられた。このうち①②については、見知らぬ人に子どもを預けるのは不安だとか、高齢者だけに任せられるのかという意見があり、やはり③の「つどいの広場」が最もシルバー事業に適しており実現性が高いように思われた。

また、市役所が子育て支援の様々なイベントを企画すると、母親と子どもはすぐに集まるが、三世代交流を目指してシルバー世代に声をかけてもなかなか集まってもらえない。地域による子育ての推進のためにはシルバー世代の参加が不可欠だが、その気になってもらうのが難しいという。それならシルバー人材センターが「つどいの広場」を運営すれば、常時三世代交流が可能になる。その意味でもセンターの「つどいの広場」参入は地域ニーズに合致しているというのが委員会の結論であった。

「おおきくなあれ」の開設

市は同センターを四か所目の「つどいの広場」の委託先に選定し、二十年十月一日に「ここに広場・おおきくなあれ」がオープンした。

市内喜田村の「おおきくなあれ」の建物は、ある企業の仮事務所として使われていた二階建てのプレハブ建築で、事務所ビルの完成後空き家になっていたものである。一階フロアは五十三㎡の広さがあり、十組程度の親子と会員スタッフがゆつくりと遊んだりおしゃべりしたりできる。そして、建物周辺に二十台程度の駐車スペースがあった。室内にカウンターや本棚、おもちゃ棚を取り付ける大工工事と「おおきくなあれ」の看板作りは

男性会員が引き受けた。また、余っているおもちゃや絵本があれば寄付してほしいと会員に呼びかけ、帰省した孫のために購入したが一度使ったきりで捨てることもできずに眠っていたというおもちゃや絵本が続々と集まった。

こうした準備と並行して、七日間コースの子育てアシスタント養成講座を開催。子どもの成長と育児講座、子どもを遊ばせるための手作りおもちゃ講習会、おやつ作り講習会、音楽講習会などを会員と入会希望者、計二十人が学んだ。その中から十二人を選抜し「おおきくなあれ」のスタッフを編成した。

選抜基準で重視したのは、若い母親とのコミュニケーション能力である。修了者は全員が自分の子どもを育て、孫の面倒を見てきた人たちで、育児の知識と経験は十分だった。ただ、「おおきくなあれ」にやってくる人たちは、子どもを遊ばせながら自分もゆとりたいたいと思いつて集まってくる。母親同士友達になりたいとも思っている。シルバースタッフに悩みの相談に乗ってもらいたいという人もいるかもしれない。しかし、それは親や姑のように目上の立場からのアドバイスではない。そこで自分の意見を一方的に押し付けるのではなく、親身になって話を聞いてあげられる人を選んだのである。

に他の三つの広場のチラシと一緒に「おおきくなあれ」のチラシを配ってもらっている。

二十二年度の利用者は母親二千四百七人、子ども二千七百七十四人の計五千八百一十一人。月平均四百三十一人で、二十三年度はそれよりも増加傾向にある。市の担当者が母親たちの集まりで聞いたところによると「あそこに行くときごく安心できる」と評判は非常に良い。

「おおきくなあれ」では子どもを遊ばせること



「おおきくなあれ」では、毎週月曜日のリズム体操、木曜日の絵本の読み聞かせ（写真右）の時間を設けるほか、イベントも盛りだくさん。クリスマス会（写真下）では、企画から準備、運営までのすべてをスタッフが役割分担して行った



「おおきくなあれ」のスタッフ研修会。子育てに関することのほか、手遊びや音楽あそび、コーチングを取り入れた講習会も行い、スキルアップに努めている

「おおきくなあれ」の運営

「おおきくなあれ」は月・土曜日の週六日間、午前十時～午後四時。〇～三歳児の子どもをもった母親が、その時間内であればいつでも自由に利用できる。利用料は無料。公園で子どもを遊ばせるのと同じ感覚である。

十二人のスタッフは毎日交替で二人ずつが当番に入る。母親と一緒に遊ばせる子どもを遊ばせ、話し相手になるのが仕事だが、それ以外に、毎週月曜日はリズム体操、木曜日は絵本の読み聞かせの

ができ、他の母親と友達になれるだけでなく、シルバースタッフと話ができる。その内容は例えば、嫁姑関係の悩み、近所との付き合い方、料理の作り方など。シルバースタッフにとってはごく普通の日常的な話題だが、同世代間のおしゃべりでは聞けない話ばかりである。

子育ての悩みは保健師に相談したり、本で読んだり、インターネットで調べることができる。しかし、核家族の中にいて、地域との付き合いのない若い母親にはそうした相談ができる相手がいな。核家族化は彼女たちを孤立化させ、それがストレスとなって、時として虐待に結びつくこともある。失われつつある地域とのつながりが「おおきくなあれ」にあれば出会えるのだ。

スタッフは自分たちに期待されているそんな役割を熟知しながら、若い母親と自然な人間関係をつくっており、自分自身もそれを楽しんでいるようである。取材当日の当番のスタッフに話を聞いてみた。

「若いお母さんたちは気さくで、自分の意見がきちんと言えるいい人ばかりです。私には同じくらの孫と嫁もいるので、嫁の気持ちや、こういう接し方をしたいのだからということが分かれます。お母さんたちにも、そんなふうに言っていればおばあちゃんはずっと喜ぶよとか、絶対怒

時間を設けている。また、誕生日会、節分、ひな祭り、子どもの日、七夕、クリスマス会などのイベントや外部講師を招いた母親のための子育て講座を開催している。

これらのイベントは十二人の子育て支援班で自主的に企画運営しており、そのために班長、副班長、企画係、環境整備係などの役割を決めている。企画係はイベントの企画を担当。環境整備係はイベントに合わせた室内の飾り付けを担当する。また、イベント企画とつどいの広場事業の運営のために、毎月第一月曜日の午後は広場を休場して班会議を開催している。

市からの委託料は、施設の賃借料、光熱費、事務費、事務用品費のほかは当番スタッフの配分金となる。当番時の時間当たり配分金額は他の職種とほとんど変わりはないが、実際には企画会議やイベントの準備などで月の半分以上の時間を費やすという。ボランティアとして取り組まないとできない仕事である。

愛顔の子育て顕彰の受賞

PRのために写真入りのチラシを作り、公民館福祉センター、各支所の住民福祉課などに配っている。各支所の住民福祉課の保健師は市内の新しく子どもが生まれた家庭を訪問しており、その折

らないと思うよとか、そういう話をしています。「私が子育てしていた頃はもつとイライラしていました。こういうところがあるから、今のお母さんは幸せだと思つ。ここから始まるお友達も多くのようです。私も若いお母さんたちとメール交換したり、ケーキを作るので家へ来ませんか誘ってもらって、もちろん行きまふと返信したりしています。

「おおきくなあれ」のこうした活動は行政にも高く評価され、二十三年十一月には愛媛県による愛顔の子育て顕彰で奨励賞を受賞している。

円滑な引き継ぎが課題

シルバースタッフはこれまでその担い手も利用者もシルバースタッフであったが「おおきくなあれ」はこれまでセンターを知らなかった若い世代にも身近なものにした。このことが今後のシルバースタッフの可能性を広げてくれるのではないかと期待されている。

また、センターでは適正就業を推進していることから、毎年開催してきた子育てアシスタント養成講座の修了者と交替する予定である。これまでに築き上げた母親たちとの関係をいかに新しいスタッフに円滑に引き継いでいくかが当面の課題である。

(山口)